
約束～天使より墮天使～

嵯峨野斎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束〜天使より堕天使〜

【Nコード】

N7676Y

【作者名】

嵯峨野斎

【あらすじ】

近藤優雄、十七歳。主人公である彼は小さい頃からいじめを受けてきた。高校生になってからも続くいじめに無気力な生活を送っていたが、ある日転校生に会った事でその生活は終わりを告げる。

注：前半はいじめについての表現があります。不愉快になられましたら申し訳ありません。――<ペコリ 「読みたくないわあ！」という方がおられましたら、お戻りくださいませ。

1 美人な転校生に抱きつかれました。・・・なぜだ。(前書き)

以前『夢よ現実に』を書いていたときにチラッと載せようか迷っていた小説です。かなり前に書いた小説ですが、一応完結しているので、載せます。ってか『夢よ現実に』の番外編を書く、とか言いながら何してんねん！と自分で思いますが、全然はかどないんだもん！！(泣)

話の内容は頭の中にあるのに、なかなか形にできない・・・。やっぱ仕事忙しいからか・・・(言い訳ですね、ハイ)

とにかく毎日更新を目指して頑張ろうと思います(はよ番外編書けや自分)

1 美人な転校生に抱きつかれました。・・・なぜだ。

『約束しよう。生まれ変わったら、君と共に生きていく事を』
そう言って、目の前にいる誰かに手を伸ばす。その手には剣が握られていた。

『それまで君を一人にする事を許してくれ・・・』
頬に熱いものが流れ落ちた。ああ、自分は泣いているのだと気付いた瞬間、向こうから笑ったような気配を感じて・・・

ピ。ピ。ピ。ピ・・・

眼が覚めたら、そこはベッドの上だった。けたたましく鳴り続ける目覚まし時計をバンツと叩き、隣に置いてあった眼鏡を持ち上げる。

「夢か・・・」

ボソリと呟いた声は少し湿っているような気がした。

ふと頬が冷たく感じて、手をやると涙が流れていた。夢の影響だろう。

「変な夢だったな・・・」

寝癖も相まってボサボサの髪をかき上げながら、彼、こんどうまさかず近藤優雄は起き上がった。

優雄は十七歳、高校二年生だ。父子家庭で、母親は早くに亡くしている。父は仕事で海外に単身赴任中なので、今はほぼ一人暮らし。昔から家事は優雄の担当だったので、苦ではない。

ただ一つ、優雄が苦にしている事は・・・

「学校か・・・」

溜息と共に吐き出されたのはどんよりと暗い声。

のろのろと身支度を整えながら、食欲もないので牛乳を胃に流し込む。

「休んじやおうかな・・・」

朝が来るたびにそう思うものの、真面目な性格がそれを許さない。やはり今日も、憂鬱な気分で家を出た。

重い足取りで着いた学校。

友達同士で仲良くお喋りしながら歩いていく生徒達が多い中、優雄は鞆を胸に抱いて目立たないように下駄箱へ向かっていた。俯き気味に歩いているせいで少し猫背になっている。

上靴に履き替えようと腰を屈めた時、突然ドンツと背中を押された。

「あ、いたの」

見上げると同じクラスの女子がクスクスと笑いながら通っているところだった。

「・・・・・・・・」

優雄は何も言わずに靴を履き替える。

こんな事は日常茶飯事だ。もう慣れている。

そう自分に言い聞かせ、教室に向かう。今日は上靴が無事下駄箱の中に入っていた。だから今日はまだ幸せな日かもしれない。

ざわつく教室に辿り着くと、自分の席まで脇目も振らず急ぐ。周りはみんな自分達のお喋りに夢中だ。そう思っていたが、突然足下に何かが飛び出して躓いてしまった。転んだ拍子に眼鏡がどこかに飛ぶ。

「何やってんだよ」

無様に転んだ優雄を、大笑いするクラスメイト達。特に足払いをかけた男子はニヤニヤと意地悪く笑っていた。

優雄は無言で眼鏡を探し、かける。

反抗すれば余計楽しませると分かっているのに、何もなかったように鞆を持ち直して席に座った。クラスメイト達はそんな自分に興味を失ったのか、またお喋りに興じる。

ここでの優雄はいつも一人だ。誰も話しかけて来ないし、こっちから話しかけようとしてもしない。唯一話しかけてくるのは昼休みの始まりの時だけ。要は程のいいパシリで、昼食を買いに行かされるのだ。最近は昼休みになると同時に屋上に逃げ込むので、お金を払わされずに済んでいる（その後の文句はいつもの事だ）。

俗に言う、いじめだ。

小さい頃からずっと苛められてきた。今はほとんど無視されている状態だが、小学校や中学校の頃はもっと酷かった。仲間はずれは当たり前で、学校の行事でも組まされる相手が嫌がって、終いには先生まで諦めて放置した。優雄の持ち物は壊され捨てられるか、手元に戻っても落書きだらけ。一部の男子からは持て余した力の捌け口にされていた。一時期登校拒否を起こしかけた事もあったが、仕事で忙しい父に心配をかけたくなって相談も出来なかった。

これまで優雄を育てるために頑張ってきた父。母親がいない事で寂しい思いをしないようにと頑張っていた姿を見てきた優雄は、どうしても話を切り出せなかった。いじめの原因の一つが、母親がいない事だったために。

だから優雄はずっと無関心な態度をとり続けた。いつも俯きがちになり、視力が悪いためにかけている眼鏡も相まってクラスメイト達はみんな優雄の顔すら覚えていないだろう。

そんな毎日が続いていく。そう思っていた。・・・今日までは・・・。

チャイムが鳴り、みんなが席に着いて先生がやってくる。その後出欠の確認を終えて出て行くのが日常だったが、今日はいつもと違った。

「転校生を紹介する。華岡薫君だ」
はなおかかおる

そう言って黒板に書かれた名前に、派手な名前だな、と優雄は思った。ドアを開けて静かに入ってくる女の子の容姿も、地味とは言い難かった。

外国の血が入っているのか、金髪碧眼、彫の深い顔立ちだ。だが不思議と、どこの国の血か分からない雰囲気彼女にはあった。誰もが羨みそうなプロポーションのとれた身体は、そこにいるだけで場が華やぐ。輝くように手入れされた髪は腰まで長く、手で梳きたい衝動を覚えるほど柔らかに波うっていた。

「・・・？」

優雄は首を傾げた。

今まで彼女に会った事はない。こんな美人なら、一目見ただけで記憶に残りそうなものだ。だが昔、どこかで会ったような気がする。・・・既視感というやつだろうか。

男子の熱い視線と女子の冷たい視線が集まる中、彼女の方はまるで誰かを探すかのようにキョロキョロと教室内を見回している。やがてその視線が優雄の上に来ると、花がぱあっと咲いたかのように笑った。

「ユウ様！」

教師が彼女について説明しているにもかかわらず、薫は優雄のもとまで一気に走り抜け、抱き付いた。

「うわっ!？」

思わず仰け反ってしまった優雄は、そのまま椅子と彼女ごと後ろに倒れてしまう。

「いてて・・・」

頭を押さえながら起き上がると、彼女は妙にキラキラした笑顔で手まで掴んできた。

「ユウ様！　ずっと・・・ずっと、もう一度お会いしたいと思って
おりました」

「・・・は？」

つい間拔けな声が出てしまった。

くどいようだが、優雄は彼女に会った記憶はない。だが眼に涙ま
で浮かべられてはそんな事を言う気にはなれない。

ハッと気がつくと、教師やクラスメイトの視線が全て集中してい
た。

美女と手を繋いでいるという幸福よりも、みんなから少々という
にはきつい睨みを向けられている事が先行きの不安を上回らせてし
まった。

昼休み。

速攻で屋上に逃げた優雄は、何故か薫と弁当をつついていた。

「美味しいですか？　ユウ様のために腕によりをかけて作りました」
そう言って差し出された弁当をパクつく。

最初、貰ういわれもないので断ろうとしたが、彼女が悲しそうな
顔をするので仕方なく食べているのだ。

「・・・あのさ、何で俺にまわりつくの？　俺、君と会った覚え、
ないし・・・」

なにせ短い休み時間の度に優雄に声をかけてはひつついてくるの
だ。男子が声をかけてもつれなく返事をするだけで、おかげで優雄
は今まで以上にクラスメイト達に睨まれるようになってしまった。

この分では無視されるどころか、もっと酷いいじめに・・・

「会ってますよ」

暗い思考に陥りそうになっていた優雄は、彼女のあっさりとした
言葉にハッとした。

「ユウ様は私を助けてくださいました。命の恩人なんです。だからこうしてまた会う事が出来て、とても嬉しいんです」

「……」

本当に心から嬉しそうに言われて、反論できない。

「私はユウ様のお傍にいらればそれだけで幸せです」

人違いじゃなろうか。

そう思った優雄だったが、彼女は確信を持って言っているらしく満面の笑顔だ。

「……さっきから気になってたんだけど、その『ユウ様』ってのやめてくれないかな。俺の名前は優雄だよ。近藤優雄」

他の人からは名前の漢字の読み方を間違われる事が多く、『まさかず』と読める人はあまりいない。優秀の優なのだから、『ゆう某』だろうと思ってそう呼んでいるのだろうか。

「優雄様ですね。ではこれからはそう呼びします」

……あっさり返された。

やはり人違いだろう。こっちから言っても信じないようだし、彼女が人違いに気付くまで付き合ってみようか。

そう思った優雄だったが、彼女の次の発言にはさすがに引きそうになってしまった。

「魔法で身体を大きくした甲斐がありました」

「……は？」

本日二度目の間抜けな声。

だが彼女は気にせず続ける。

「優雄様はお忘れでしょうが、私の本来の姿は花の妖精です」

「……へ？」

「あ、他には誰も見ていない事ですし、お見せしましょう」

そう言って、啞然としている優雄をおいていそいそと立ち上がる。
「解除」

一言そう呟いたかと思うと、薫の身体が光りはじめた。正視出来ないほどの光を放つ薫に、優雄は手で眼をかばう。

「優雄様！」

しばらくして聞こえた、先程より幾分高くなった気がする声に、
ゆっくり手をどけると・・・

そこには手のひらに収まるほど小さい薫がいた。背中には虹のように綺麗な色合いの羽が生えている。

「本名はローズと申します」

まさに花の妖精と呼べる姿の薫が、ニッコリと笑いかけてくる。
だが優雄は返事をするどころではない。

別にファンタジー好きでもなければ空想家でもない優雄は、目の前の事実についていけなくなった。つまり・・・現実逃避をした。

「優雄様！？ 優雄様！！」

悲鳴のような薫の声を聞きつつ、優雄は失神した。

2 俺の前世はただの人間ではなかったらしいです。・・・信じられるか。

「何だったんだ・・・」

家に帰ってきた優雄は、晩御飯を作りながら一人ブツブツと呟いていた。

昼休み、眼が覚めた時は薫はちゃんと人間の姿に戻っていて、心配そうに声をかけてくる彼女からつい逃げてしまった。頭の片隅で悪い事をしたか、と思わないでもないが、あの状況では誰だって逃げたくもなるだろう。

その後、いつもより陰湿になったいじめにあったが（薫につれなくされた八つ当たりだろう、主に男子）、薫の事で頭がいっぱいで普段以上に無関心になっていたかもしれない。

「・・・夢だった。うん、そう考えればいい」

一応の結論を出して心の平穏を取り戻したところで、出来たご飯をリビングに持っていく。席についてさあ食べよう、というところで、ピンポンとインターホンが鳴った。

「こんな時間に・・・？」

時計は七時を指している。こんな時間に訪ねてくる客に心当たりなどない。

首を傾げつつ、インターホンの受話器を耳に当てると、聞こえてきたのは・・・

『こんばんは！ 優雄様！』

先程まで心を乱してくれていた張本人の声だった・・・。

「・・・何でうちに・・・」

『優雄様と一緒にいたいからです』

こんな美女に言われれば誰だって断れないだろうとは思う。が、昼休みのあれが記憶にあるうちは素直に頷く事も出来まい。

「悪いけど、俺忙しいんで・・・」

『だったらお手伝いします！ 家事は得意ですから！』

「いや、別にいいから・・・」

『それに大事な話もあります』

「・・・」

大事な話とやらが何かは見当もつかないが、ここまで必死だところ
がちが悪いような気がしてくる。嫌な予感を覚えつつも、仕方なく
優雄は玄関の鍵を開けに向かった。

「で、話って？」

晩御飯を食べるところだった優雄は、薫が持ってきた弁当も併せ
て二人でご飯を食べていた（薫は優雄と一緒に食べるつもりだった
らしい）。

「勿論昼休みの続きです」

続きがあったのか・・・。てっきり人違いだったと理解して諦め
たと思っていたのに。

「本当に人違いじゃないのか？ 俺は君の事全然知らないんだぞ？」
思わず箸を止めて訊いた。昼にも同じ質問をしたが、「会ってい
る」と言われても全く覚えがない。

「無理ありません。私達が会ったのはおよそ百年ほど前ですから」

・・・薫が言う事は大抵ぶっ飛んでいる。

そう脳裏に刻んだ優雄は食べる手を再び動かしながら黙って聞い
ていた。

薫は食べ終わって箸を置きながら続ける。

「百年前、優雄様はこことは違う世界におられました。そこは天界、

地界、人間界と三つの世界が隣り合っている世界です。天界には天使が、地界には墮天使が、人間界には人間が暮らしているんです」遅れて食べ終わった優雄も箸を置いて、彼女の話を実剣に聞くべきか、と悩みながらもなにはなしに聞く。

「天使は天界と人間界を行き来でき、墮天使は地界と人間界を行き来できました。人間は他の世界には行く事が出来ません。ここまではよろしいですか？」

「・・・ああ」

もうこうなったら自棄だ、最後まで聞いてやろう、と腹を据えた。「そこでのあなたはユリウスという、天使と人間との間に生まれた存在でした」

だから『ユウ様』と呼んでいたのか。

優雄は心の中で思う。

「ユリウス様は天界からの仕事で、人間界で墮天使の監視をしておられました。彼らが悪事を働かないように。彼は誰にでも優しく、気さくな人柄で、人間達から随分慕われておりました。私はユリウス様に助けていただいてからはずっと行動を共にしておりましたので、ユリウス様がどんなに素晴らしい方なのか、よく知っております」

「・・・・・・」

薫の言うユリウスとやらが、自分と同じ人間（天使というべきか？）だとは思えなかった。それだけたくさんの人に慕われる素晴らしい人間だったなら、今の自分とは雲泥の差だ。

「ユリウス様は剣の達人であり、魔法の使い手でもありました。天界でも人間界でも、彼ほど優秀な使い手はほとんどいませんでした。ですが・・・」

眼をキラキラ輝かせて嬉しそうに話していた薫の様子が、突然変わった。

「ただ一人、ユリウス様と同等の力を持っていた堕天使が突如人間界を脅かし始めました。彼の名はアイヴズ。地界の堕天使達を率いて人間界でたくさんの人間を奴隷にしたんです」

「・・・奴隷？」

学校の授業くらいでしか聞かない言葉に、優雄は眉を顰めた。

「堕天使は人間に契約を持ちかけるんです。その人間の望みを一つ叶える代わりに、見返りとして奴隷にさせる契約を。そうすると生き死にも堕天使次第です。寿命は堕天使と同じになりますが、死ぬと命じられれば死にます。そして契約した人間が死ぬと、その魂は生まれ変わる事が出来なくなり、永久に彷徨うようになります。憎しみを募らせた魂はやがて地界に堕ち、理性をもなくして魔獣になってしまう」

「魔獣・・・」

聞いた事もない名前だ。思わず呟くと、薫は悲しそうな表情になって頷く。

「魔獣は人間界に這い出て、人間を襲います。誰かに倒されるまで、ずっと・・・」

「・・・じゃあ倒されれば魔獣になってしまった魂は救われるんだな？」

いつの間にか真剣に話を聞いている事に気付かず、身を乗り出す。

「ある意味では、そうですね・・・」

「？　　どういう意味だ？」

「・・・倒された時点で魂は消滅してしまうんです。まるで存在していなかったかのように。理性を失っているとはいえ、元は人間だったわけですから、人間を手にかける事はとても苦しい事・・・。それから解放されるなら、本人の救いにもなるかと・・・」

「・・・」

優雄は質問してしまった事を後悔していた。そもそも薫の話は突拍子もないものだ。信じそうになっていた自分に、無理矢理突っ込みを入れる。

（何で俺はこんな話を信じそうになってんだ？ 有り得ないだろう）

頭を振って後悔した事を振り切ろうと躍起になっていると、薫はそれを悲しんでいると受け取ったのか、話を続けた。

「人間界が悲しみに沈む中、それを救ったのがユリウス様です。堕天使から人間を救い出し、アイヴズを封印して人間界に平和をもたらしたのです」

薫の言動からユリウスが英雄視されている事は分かっていた。だが聞けば聞くほどそんなすごい人物の生まれ変わりだとは思えない優雄は、放っておかれていた皿を片付ける事で話を終わりにしようとした。

「優雄様？」

「悪いんだけど、俺疲れてるからさ。今日のところは帰ってもらえるか？」

そう言うと、薫は申し訳なさそうに頭を下げてきた。それにつられて柔らかな髪が肩から零れ落ちる。

「すいません、そんなにお疲れだとは思わず・・・ではここは私が片付けておきますので、優雄様はお休みになってください」

「いや、いいよ。君も早く休んだ方がいいだろう」

眼も合わせず台所に向かう優雄に、薫は何かを感じたのかそれ以上何も言わずにいてくれた。

変な態度をとってしまった。

静かに帰っていく薫の背中を見送りながら、優雄は溜息を吐く。

薫は何も悪くない。ほとんど自分の八つ当たりだ。

自分こそ申し訳ないという思いに、肩を震わせる。

（明日、謝った方が良いかな・・・）

皿を洗いながら、再び大きな溜息を吐く優雄だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7676y/>

約束～天使より堕天使～

2011年11月23日21時50分発行